

飲酒運転を根絶しよう!①

～飲酒運転の危険性～

脳の機能を麻痺させるアルコール

アルコールには麻痺作用

情報処理能力 注意力 判断力 が低下

- 気が大きくなり速度超過など危険な運転をする
- 車間距離の判断を誤る
- 危険を察知しブレーキを踏むまでの時間が長くなる など

結果

交通事故に
結びつく可能性高い

「何人も、酒気を帯びて
車両等を運転してはならない。」
(道路交通法第65条第1項)

飲酒運転は、ビールや日本酒などの酒類やアルコールを含む飲食物を摂取し、アルコール分を体内に保有した状態で運転する行為です。

アルコールには麻痺作用があり、脳の働きを麻痺(まひ)させます。一般に「酔う」とは、血中のアルコール濃度が高くなることにより、大脳皮質(大脳の理性や判断を司る部分)の活動をコントロールしている大脳下部の「網様体」が麻痺した状態を言います。お酒に酔うと、顔が赤くなる、多弁になる、視力が低下するなどの変化が現れ始め、さらに知覚や運転能力を司る部分が抑制されることにより、同じ話を繰り返したり、足元がふらついたりします。

このように、飲酒時には、安全な運転に必要な情報処理能力、注意力、判断力などが低下している状態になります。具体的には、気が大きくなり速度超過などの危険な運転をする、車間距離の判断を誤る、危険を察知しブレーキペダルを踏むまでの時間が長くなるなど、飲酒運転は、事故に結びつく可能性が高いのです。

また、低濃度のアルコールであっても運転操作等に一定の影響が見られること、また、酒の強い人も弱い人と同様にアルコールの影響があることが各種調査研究により明らかとなっています。

(警察庁ホームページ/<http://www.npa.go.jp> より)